

● 授業研究 ●

子どもの視線が交わる学び合いの実現 学級と授業者の個性を生かしたアプローチから

福島県 須賀川市立長沼小学校（校長 冠木 誠）

- ① 児童が仲間とつながりながら、自ら学びとる力が育つ授業をつくる。
- ② 仲間とつながる学びを通して、学びに向かう生き方を育てる。
- ③ 学び合いの中で、思考力・判断力・表現力を育てる。
- ④ 指導者と児童の個性を生かしながら、「子どもの視線」にフォーカスした研究をする。
- ⑤ 教師集団が、「チーム長沼」として授業を磨き合う校内研究をする。

はじめに

本校は、福島県中通りに位置し、児童数101名の小規模校である。西に勢至堂（せいしどう）峠を控え、2本の河川を中心とした田園の広がる自然豊かな学区である。

児童の多くは、3世代同居の家庭より通学しており、心豊かでまじめな者が多い。

学力は、低中学年の各種標準テストでは、全国平均並みまたはやや低い結果だが、少人数学級での指導により、高学年になると学力が向上し、全国平均を上回る。

また、安定した人間関係の中で成長できるので、学びに対する姿勢がしっかりとっている者が多い。ただし、幼少時から同一集団での生活のため、言葉によるコミュニケーションの必要性が乏しく、言語活動による学び合いが成立しにくい傾向がある。

I 研究の構想

1. 目指す学び

私たちが育てる子ども達は、価値観が多様化し、知識の上書きが加速する社会に溝がけていく。そのような社会では、知識は日々更新され、膨大な知識は細分化・専門化する。子ども達には、知識の記憶ではなく、検索できるスキルが求められるようになる。また、専門性を持った個人が各自の個性を生かせるチームに集まり、つながりながら問題を解決する力が求められる。

小学校では、検索の手がかりとなる基礎的知識を育てるとともに、チームでつながりながら学ぶために、それぞれの良さを持ち寄って学ぶすばらしさや、その喜びを味わわせることが必要だと考えている。

2. 指導する側の課題

自分たちが受けてきた知識重視型の学びから発想した授業を続けていては、目指す学びが実現できないことを、近年強く自覚するようになり、授業づくりの大きな転換を模索し始めた。

平成28年度から授業の中で「学び合い」を成立させる研究を行い、この2年で児童の「学び合い」は、徐々に形になってきていると感じている。

しかし、子ども達は授業者の発問に対して、黒板の前にいる授業者に向かって話し、それを授業者が評価して児童に返すスタイルから未だに脱却できず、学びの主体性の面で大きな課題が残っている。

さらに、児童の学び合いが主体性を持てば持つほど、授業者の経験値やコーディネート力が必要となり、経験も得意分野も個性も異なる教師が、同じ主題に向って同じ手法で進める研究に限界を感じている。

3. 私たちの研究

私たちは、従来型の教師主導授業から抜け出すためには、教師もチームで課題を解決していく仕事を経験するべきだと考えた。これまでのように、年次計画で成果を積み重ねていく授業研究のあり方から離れて、以下の視点で取り組むことにした。

- (1) 授業者と子ども達の個性や実態から発した、学級ごとの課題をスタート地点として研究ができるようにする。
- (2) 授業者個々が、その課題や目的意識を独自に持ちながらも、めざす授業像をコアとして共有する研究テーマにする。

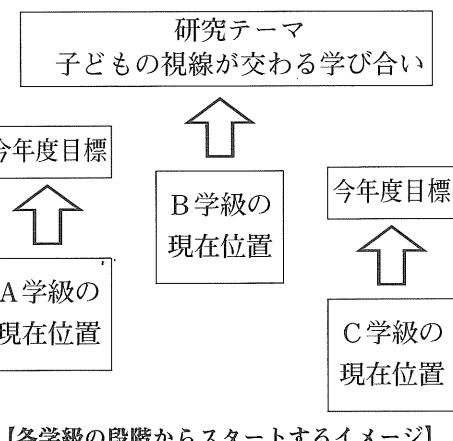
(3) 教師側から見た授業技術に関する研究ではなく、子ども達の姿に依拠した研究にする。

(4) 主体的な学びを創出できる指導者は、自らも主体的に学ぶ者であることを自覚して研究にあたる。

これらを受けて、各自が課題を踏まえたアプローチをしながらも、全員の研究を結び付けられるコアとして、研究テーマに「子どもの視線が交わる」ことを掲げた。

このテーマは、指導者側だけでなく子ども達にも保護者にも分かり易い。また、研究開始時の各学級の実態、授業者の実力の現在位置に差があっても、そこをスタートとして、めざす授業とのギャップを一段階ずつ埋めていく目標を持つことができる。

(下図参照)



さらに、授業のリフレクションでは、自然に子ども達の学ぶ姿が話題の中心になるとを考えている。

私たちは、この研究に参加する者が”チーム長沼”として、互いにそのよさや個性を出し合い学び合いながら、理想の授業に近づいていく実りある研究を実現しようと考えている。

II 研究の実際

1. 1学年の実践

(1) 子ども達

能力差は大きいが、学習への意欲がどの児童からも感じられる。話すことが大好きな子が多く、積極的に感じたことや思いを伝えようとする。

一方、聞く力の不足により、互いの発表がかみ合わず、話し合いが高め合う方向にいかないことが課題である。

(2) 担任の現状

子ども達の視線がどうしても教師の方を向いてしまうことが多い。子ども同士の視線が交わるように、学び合い場面での声かけの言葉やタイミングを改善する必要を感じている。

(3) 今年度の目標

教師に向かって発表せず、友達の方を見て話せるようにしたい。

友達の考えを聞いたり、聞いてわかったことやわかりにくかったことを感じながら聞けるようにしたい。

(4) 今、取り組んでいること

児童の視線を教師から児童に変えて、子ども達が皆、自由に話せるような空間を作るために、学習内容に応じて机の配置を変えたり、話すのが苦手な子も話せるように、小グループやペアによる学び合いをしたりしている。

(5) 授業の実際

◎ 算数科 「たしざん」

1位数どうしの繰り上がりのある加法計算の仕方について理解する。

① 子どもの姿 1

小グループにしたことで、子どもの視線が交わりやすくなった。発言する子に、他の子の視線が集まり、視線を交えながらコミュニケーションする姿が実現した。



◆ 発言者の方を向く子ども達

② 子どもの姿 2

指導者が口の字型の机配置の一角で、子ども達と同じ目線で授業を進めているので、教師だけに注目することが減少した。



◆ 教師の位置が変わった

(6) 成果と課題

担任が少しづつ子ども達の視線から外れ、子ども同士の視線が交わり始めている。友達の考えを聞きたいという姿も表情から伺える。今後は、「聞く」ことを意識させ、互いの考え方や感じ方を共有できる指導をしていきたい。

2. 2学年の実践

(1) 子ども達

前向きに取り組もうとする子が多い。変化に抵抗があったり、個別の支援を必要としたりする子もあり、能力差が大きい。

まだ、教師に考えを伝えたい子も見られるが、友達との考え方の交流を楽しむ姿がみられるようになってきている。

(2) 担任の現状

子ども達の考え方や視線が交わることができるように、言葉をつなぐことを意識している。しかしここで、個別の対応に追われてしまうことが多い。

(3) 今年度の目標

自分の考え方をしっかりと持たせ、子どもの視線が交わる学び合いをさせ、どの子も自らのよさを積極的に表出する学級集団にしたい。

(4) 今、取り組んでいること

机の配置を口の字型にして、児童の視線を教師から、児童に変える試みをしている。

自由な発想を出し合い、認め合い、学び合い、学んだことを活用する経験を重ねていている。

自分の考え方を持たせるために、ICT機器を活用し、具体的なノートづくりの指導をしている。

(5) 授業の実際

◎算数科「かけ算（2）九九をつくろう」

九九の構成の仕方を理解する。

① 子どもの姿 1

ICT機器に映る友達のノートを見たり、説明する友達を見たりしながら、自分達が

見つけた算数の法則に名前をつけて、互いの考えを理解し合った時、子ども達の視線は自然に交わった。



◆ 発言者の方を向く子ども達

② 子どもの姿 2

指導者が口の字型の机配置の一角で、子ども達と同じ目線で授業を進めているので、教師だけに注目することが減少した。



◆ 子どもの視線から外れる教師

(6) 成果と課題

子どもの視線が交わり始めており、話し合いが活性化し、互いを認めあう学びができてきた。発言しなかった子のノートに友達の考え方のよさや、考えがヒントになり分かったことなどが書き込まれるようになり、学び合いの足跡が見られた。

しかし、まだ教師の働きかけが多く、話し合いへの支援に課題が見えた。言葉かけ・コーディネート術の研修を進めたい。

3. 3学年の実践

(1) 子ども達

学びに向かうまじめさを持っている。能力差は大きいが、基本的な学習内容は、よく身に付いている。

学びでの役割が固定化しており、授業を動かし、自力で理解していく集団と、学びは友達任せといった姿勢の集団に、二極化する傾向が見られる。

(2) 担任の現状

子ども達の視線が交わることができるよう、教師の発言を減らし、児童の言葉をつなぐことと、立ち位置を意識している。

(3) 今年度の目標

二極化解消のための意識改革をしたい。そのために、誰も置いていかず、皆で進む学びの素晴らしさを味わわせることから始める。どの子も自らのよさを積極的に出せる学級集団にしたい。

(4) 今、取り組んでいること

机の配置を密集した口の字型にして、児童の視線を教師から、児童に変える試みをした。本授業のように自由な発想を出し合い、それが認められる学習を大切にしている。

(5) 授業の実際

◎ 算数科 「長いものの長さのはかり方」

「道のり」「きより」についての確認、 $1000\text{m} = 1\text{km}$ であることを理解する。

① 子どもの姿 1

発言する子に、他の子の視線が集まり、

視線を交えながらコミュニケーションする姿が実現した。写真では、発言している女子に、視線が集中しているのが分かる。



◆ 発言者の方を向く子ども達

② 子どもの姿 2

指導者が口の字型の机配置の一角に、子ども達と同じ目線で授業を進めているので、教師だけに注目することが減少した。



◆ 教師の位置が変わった

(6) 成果と課題

子どもの視線が交わり、二極化が解消しつつある。おとなしかったM子の表情は柔らかくなり、自分から発表することが増えた。また、我先にと発表していた子は、友達を待つようになった。また、友達の考えをもっと聞いてみたいという声も聞こえてきた。「分からないうから教えてほしい。」と子ども同士が言えるようにしたい。

4. 4学年の実践

(1) 子ども達

極端な能力の二極化がある。どの子どもも学びに向き合うことができるようになり、学びから逃げ出さなくなった。友達の話を聞くようになり、学習や生活の場面で子ども達がつながり始めている。

(2) 担任の現状

昨年度まで指導困難だった学級の学習訓練からやり直すことに困難さを感じている。学びへの主体性が持てない子ども達への支援が課題である。

子どもの気づきや考えをつなぐような言葉かけを意識して授業を行っている。

(3) 今年度の目標

個々の思いを大切に、自他のよさを認め合える学級集団にしたい。みんなで学ぶことで、「わかる」「できる」喜びを味わわせ、進んで学ぼうとする意欲を高めていく。

(4) 今、取り組んでいること

机の配置をコの字型にする。教師が立ち位置を変えるなど、子どもの視線を教師から子どもに見える試みをしている。進度別に小グループで学習し、積極的に話し合って解決する経験を積み重ねている。

(5) 授業の実際

◎ 算数科 「わり算の筆算（1）」

既習事項や経験を生かして、暗算の仕方について考え、被除数を分解したり、被除数を10を基にしてとらえたりして暗算できることに気づかせる。

① 子どもの姿 1

発言する子に視線が集まるように、机を口の字型にした。自席で話す子どもにも、すぐに視線が集まるようになった。



◆ 机の配置を変える

② 子どもの姿 2

授業中自由に移動して友達に伝えたり、聞いたりしながら、学ぶことを楽しむ姿が見られるようになった。



◆ 進んで友達とつながり合う

(6) 成果と課題

算数科になると暗い顔をしていた子も、笑顔で「分からない」と友達に話しかけたり、友達の様子を見に行ったりするようになった。友達とつながり合って学ぶことで、学習内容の理解が高まっている。子どもが自分なりの理解で自分に落としていく学びを邪魔しないような、教師の言葉かけを意識していきたい。

5. 5学年の実践

(1) 子ども達

学習課題に真剣に取り組み、自分の意見を持つことができる。気楽な雰囲気だと自由に発言できるが、失敗を恐れ、発表に対しては消極的になることが多い。学習課題に沿った学び合いが持続できず、話し合いが脱線してしまうことがある。

(2) 担任の現状

児童の思考の妨害にならないように発問内容を精選することと、発表や話し合いの機会を奪わないように最適な介入が課題である。できるだけ教師の発言を減らすことを意識しながら、授業を行っている。

(3) 今年度の目標

思っていることを友達に聞いてもらうことの意義や、友達と話し合うことで考えをよりよくしていく楽しさを味わわせる。

また、視覚的支援として板書の工夫、ICT機器の活用によって、話し合いが脱線しないようにする。

(4) 今、取り組んでいること

3人1組の小グループを基本とし、不安があるときはすぐに近くの児童と話し合えるようにしている。

児童が自分達でクラスの雰囲気を明るくするために、様々な工夫をしている。

(5) 授業の実際

◎ 体育科 「けがの防止」

けがをしたときに、どのような手当てをするのが適切かを、実演や話し合いを通して考え、簡単な手当の仕方を理解する。

① 子どもの姿 1

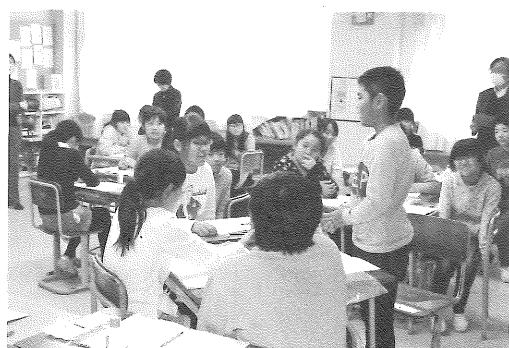
発表する児童に視線が集まっているだけでなく、発表する児童にも聞く児童にも、自然と笑顔が見られるようになった。



◆ 明るい雰囲気の中での学習

② 子どもの姿 2

教師が指名した児童が立って発表するのではなく、発表したい児童が自発的に立つて発表するようになった。



◆ 児童主体の話し合い

(6) 成果と課題

個性を生かすための雰囲気づくりの成果が出て、笑顔が多い授業になってきた。話し合いは児童に任せ、教師は聞き役に徹することで、意見を引き出すことや話し合いの方向を修正することができた。教師がこれまで待つかの判断が難しかった。判断材料を増やすために、教材研究を深めたい。

6. 6学年の実践

(1) 子ども達

自己の考えを形成する中で、友達と自然と話し合う姿が見られる。さらに、話し合いの場面では、反応しながら聞くなどの、話す・聞く力が身についてきている。

しかし、全体共有では、話し出せなかったり、聞き手に回ったりする子が多くなり、特定の児童の発言で話し合いが進んでいくという課題がある。

(2) 担任の現状

様々な考えに触れ、思考していくことで、考えが変わったり、新たな考えが生み出されたりすることが大切だと考えている。子ども達が話し合いながら考えを深め、高めていくために、課題設定や個々の児童が考えを形成できる授業づくりが課題である。

(3) 今年度の目標

聞き手にばかり回るのではなく、自分の考えを持つ・発信する・受け止める・思考する学びの流れをしっかりと行つていき、学習に主体的に取り組む意欲を高める。

(4) 今、取り組んでいること

机の配置を口の字型にするが、子ども達が1人でじっくり考えたり、友達と話し合ったりできるように、机の間隔を空けるようにしている。また、一人一人が話し合いに参加できるように、2、3人の少人数での対話などを取り入れている。

(5) 授業の実際

◎国語科「『鳥獣戯画』を読む」

文章を読み、タイトルにある絵を「読む」とは、どういうことなのか、叙述に根拠を持ち、考える。

① 子どもの姿 1

自分の考えをもとに、友達と話し合ったり、わからない点を聞いたりして、主体的に考え、学習している。



◆ 様々な友達の考えに触れながら話し合う

② 子どもの姿 2

友達の考えが書かれた短冊を見ながら、全体で共有をしたり、自分の考えをまとめたりすることができた。



◆ 友達の考えを一覧できる

(6) 成果と課題

この授業では、既習と絡めて考え、様々な意見が生まれた。また、少人数での話し合いは、一人一人が話し合いの主体となっていた。子ども達は、つながりから学べるようになってきた。こうした話し合いから生まれた考えをもとに、全体共有をして、さらに自分の考えを深めていく機会を今後、意識的に設定していきたい。

7. 6学年（理科）の実践

（1）子ども達

自分の考えを持ち、積極的に発表できる児童が多く、発表をする時には、図をかいて説明したり、友達の考えに対して自分の考えを述べることができる。探究心が旺盛で、実験や観察に意欲的に取り組む児童が多いので、気づきや発見を共有しながら、科学的なものの見方や考え方を育てていきたい。

（2）担任の現状

子どもの力で、適切な結論を持っていく学習課題を設定している。また授業中の子どもの意見やつぶやきを取り上げ、学び合いに生かすことを意識している。

（3）今年度の目標

グループで協力して実験や観察を行いながら、お互いのよさに気づくとともに、認め合ったり、意見の交流ができるよう適切に指導や助言をする。

（4）今、取り組んでいること

教師の立つ位置を黒板の前ではなく児童の脇にすることで、児童の目線で板書を見たり、児童の学び合いに参加したりするようにしている。

（5）授業の実際

◎理 科

無色透明な水溶液を蒸発させるという方法で水溶液に溶けているものを調べ、水溶液には、固体や気体が溶けているものがあることを理解する。

① 子どもの姿 1

グループで協力して実験を行い、お互い

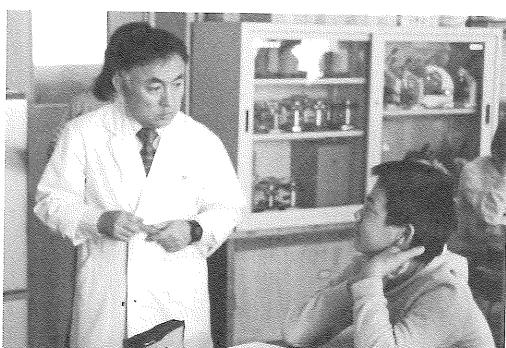
の気づきを交流しながら変化の様子を実感している。



◆ お互いの気づきを交換し合う子ども達

② 子どもの姿 2

児童の気づき、つぶやきを取り上げ、全体で共有することを通して、児童の思考の深まりが見られた。



◆ どうしてそう考えたのか理由を聞く

（6）成果と課題

教師の立つ位置を変えると、前の方に座る児童も自然と後ろを向いて発言したり、話を聞く時に視線を合わせる場が増えた。

実験結果が、他の班と違う班に対し、教師主導で結果をまとめてしまうことがあった。どうして違ったのか、児童に投げかけることで、児童の思考にも深まりが見られたのではないか。

III 検 証

1. 成果について

(1) 研究の主題について

私たちは、「子どもの視線が交わる…。」の一点に集中して研究した。

もちろん最終的な目標は、主体的で深い学びのある授業の実現であるが、この一点から子どもの達の姿を見取る中で交わされる議論は、授業者の視点も観察者の視点も子ども達の姿に集中し、主体的で深い学びにつながる内容になった。

(2) 子ども達の成長について

授業者が黒板の前から消え、机が口の字型となり、正面に友達がいる環境になり、授業者が発言を引き受けて評価したり、取捨選択したりしなくなると、子ども達の主体性が引きだされ始めた。

子ども達の視線は友達に向かられ、授業者の「正解」を探り当てる手続きだった授業が、学び合いに変化していった。

まだ、発言への積極性の二極化の解消や「分からぬ」とことを表出できるまでに至らないが、子ども達は、段階を踏みながら成長している。発言に消極的な子のノートに、自分が影響された友達の発言が記されたり、助け合って学んだりする姿が見られるようになった。

(3) 指導者の成長について

子ども達の視線を追っていくうちに、指導者側の姿も変わっていった。個々の子どもを見取ろうとするようになった教師。友達の発言を聞く側の子を見取るようになった教師。子ども個々の納得を大切にしようとする指導に変わってきた教師。

授業実践には、授業者としての成長も記されている。

2. 残された課題と今後の研究について

(1) 子ども達の成長について

各学級からあげられた課題に「聞く力」の不足があった。自己表出が自己満足で終わってしまう子がまだ多く、思考が交わらないことがあった。次の段階として、聞き合う姿を育てる必要がある。

(2) 指導者の成長について

指導側の働きかけが中心になっている部分が残っている。手立ての評価ではなく、子ども達の姿に注目した評価をもとに、改善策を考えることを徹底していきたい。

また、学級を全体としてとらえる傾向も残っている。一人の子どもを深く見取っていく意識が必要である。

(3) 研究主題について

今後は、交わされる視線の意味や質を高めたい。何が伝わったのか、何を感じながら友達に視線を向けているのかを問う見取りが必要である。「伝えたい」「聞きたい」「伝えることができる」「聞くことができる」などの学びに向かう姿勢や学ぶためのスキルが高まる授業を考えたい。

IV おわりに

子ども達とそれを取り巻く人や社会の変化により、教育現場の困難さが増しているとの世評があり、私たちもそれを肌で感じている。

しかし、今回の取り組みを経て感じたことは、「子どもの本質は変わっていない。」である。子どもの持つ「学びたい。」「分かり合いたい。」という根源的な欲求は消されていない。私たちは、それを引き出す学びを今後も追究していきたい。

(代表 校長：冠木 誠)